



第 51 号
令和 5 年 1 月

研究室だより

松下道信

コロナウイルスの出現から三年が経ちました。未知のウイルスの封じ込めに傾注してきたこれまでのあり方を改め、この一年で社会はいわゆるウィズ・コロナへと大きく方針を転換しました。大学も、手指消毒の励行、マスクの着用、換気等の措置は継続しているものの、ほとんどが対面講義に復しました。

ただ依然として流行は続いています。夏には第七波、また、最近では第八波と呼ばれる大流行が見られ、影響はむしろじわりと身近に迫ってきている感じを受けます。教職員、学生を問わず、罹患する人も少なくありません。やや弱毒化していると思われるとはいえ、改めて感染防止に協力をお願いしたいと思います。

国文学会も少しずつ本来の活動に戻りつつあります。まず六月二十六日には「ぶらり伊勢のまち歩き」

と題して、三年ぶりに文学散歩を行いました。また、対面式での開催となった倉陵祭期間中の十月二十九日には、楊登氏による「『おくのほそ道』「象潟」章段における蘇軾「西湖」の受容」という発表報告が、ほぼ従来と同形式で行われました。十一月十日には、大妻女子大学の柏木由夫名誉教授による講演「百人一首」編纂に込められた心が開催。この講演も三年ぶりの対面による講演でした。講演後、柏木先生から、コロナ下にあつてこのように実際に人と会って話げできたことがうれいという旨のお言葉をいただいたことが印象的です。

昨年度は結局実施できなかったフィールドワークも、様々な制約はありますが、少しずつ以前の状況に戻りつつあります。

ところで、今年度三月をもって上代文学担当の大島信生教授、中世文学担当の深津陸夫特別教授が退任なさいます。大島先生は、天理大学文学部を卒業後、本学大学院文学研究科に進学。その後、本学助手を経て、平成四年に本学に着任され、爾来、教育及び

目次

研究室だより	松下道信	1
研究室の図書	深津陸夫	2
節目の年に	大島信生	3
ごあいさつ	平石 岳	4
委員長より	森井菜月	5
上代文学研究部会活動報告	辻希乃華	5
中古文学研究部会活動報告	杉本優奈	6
近世文学研究部会活動報告	兒島靖倫	7
近代文学研究部会活動報告		
.....		
中村始桜・西 美雪・森 涉遥		8
国語学研究部会活動報告		
.....		
打田楓茄・谷川奈穂		9
漢文学研究部会活動報告		
.....		
井上幸之佑・中野 瞳		10
文学館・メディア史研究部会活動報告		
.....		
西潟史有香		11
令和四年度		
フィールドワーク旅程記録		12
令和三年度博士論文		
.....		
修士論文・卒業論文目録		13
令和三年度卒業論文報告	岡野裕行	15
令和四年度講義一覧		15
上小倉教授の書が第九回日展に入選		15
令和四年度研究発表会発表要旨	楊 登	15
令和四年度講演会報告	森絵美里	16
令和四年度文学散歩報告	中村始桜	17
合格・就職体験記		18
国文学会活動報告		19
国文学会会則		20

研究に大いに力を奮ってこられました。また、八年間にわたり国文学科主任を務められた後、神道博物館館長、研究開発推進センター長をお務めになりました。温和で暖かなお人柄は、学生のみならず、誰からも敬愛される存在です。先生には、退任後も特別教授として引き続き御指導いただくこととなっております。今後ともよろしくお願います。

深津先生は、東京教育大学文学部を卒業後、名古屋大学大学院文学研究科に進学されました。同大学院修了後は、本学国文学科助手を六年務められ、本学に着任されました。国文学科主任のみならず、神道博物館館長、学長補佐、教育開発センター長、文学部長を歴任。平成三十年三月に本学教授を退任後は、特別教授に着任されました。私が本学に講師として着任したのは、深津先生がちょうど主任をされていた時でした。理知的で万能な先生から見て、頼りない新任に内心やきもきされたのではないかと思います。いつも暖かい微笑みでもって見守ってくださったのが思い起こされます。長年にわたる御指導誠にありがとうございます。

また、やはり今年度をもって島田規代助手の任期が終了します。島田助手は私が主任になったのと同時に着任しました。コロナウイルスが猛威を振るう中、共に研究室を運営してきたこともあり、一種の戦友の感があります。研究室では学生と打ち解けて話す姿をよく見かけました。ありがとうございます。

わかりました。近代文学は昨年度不開講となりましたが、その近代文学の担当者として着任された平石岳助教です。これからの新たな活力に期待です。

私が主任となって以来、この三年、ここではコロナウイルスのことばかりを記していたように思います。これは、一つには将来のためにコロナ下の大学の様子を記録しておかねばならないとの使命感からではありませんが、それも今回でひとまず終了を迎えた感じがしています。最近では、中国が、問題を抱えつつもようやくゼロ・コロナ政策から方向転換するなど、世界は本格的にウイズ・コロナへと進みつつあります。本学においても様々な変化があったことは上に記したとおりです。他方、春にはロシアによるウクライナ侵攻が起こり、それに伴い、国内でもインフレが急激に進行するなど、世界的にじわりと不安定な様相を示し始めてもいます。

こうした情勢の中、本学では来年度から新カリキュラムが導入されます。これが単なる小手先の変更でなく、我々を取り巻く様々な変化に対応できるものであるかどうか、そして、学生の皆さんにとって本質的な変化・向上へとつながるものとなっているかどうか——教育に関わる者として深く自らを戒めるところです。

(国文学会会長・教授)

研究室の図書

深津睦夫

この三月で皇學館大学を退職します。平成三十一年三月に一度定年を迎えたのですが、「特別教授」という肩書きをいただいたので、さらにこの五年間勤めさせていただきましました。奉職以来四十二年間を皇學館で過ごしたことになります。長い年月ですから、いろいろなことがあったはずなのですが、ほとんど忘れてしまいました。後顧の憂いもなく、清々しい思いで去ることができそうです。そのような中で直面しているのは、「本」の問題です。

研究室に何冊の本があるのか、数える気にもなれないのですが、備え付けの天井高の木製の書棚(総幅二七メートル)とスチールの本棚(総幅五・三メートル)のほかに、個人的にスチールの本棚を八本(総幅六・四メートル)入れてありますから、ざっと計算して、二千冊くらいになるでしょうか。退職に際して、これをすべて研究室から出してしまわなければなりません。

昔ならば図書館に寄贈すれば良かったのですが、今はそれが難しくなっています。図書館の収蔵能力には限度がありますから、すべての退職教員が図書館に本を残していくことになると、あつという間に書庫が埋まってしまいます。立派な蔵書を有していらつした大先生の場合は、「○○文庫」として、集密書庫にまとめて配置されていますが、私のそれがそんなふうに出されるような

ものでないの言うまでもありません。では、これらの本をどうするか。ここ二三年いろいろ考えていました。

当初は、できる限り自宅に入れようと考えました。そのためにどこかの部屋を書庫に改装することも検討しました。しかし、家族の賛成が得られず、この案は瞬時に消滅しました。家に持ち帰るのは最小限ということで、自分の専門に関する本や思い出深い本などを厳選して、たぶん数百冊。それ以外の本は、三分類しました。

まず、図書館に入れてもらう本。前述のような事情ですから、図書館に所蔵されていない本だけを選びました。ありがたいことに、本学の国文学関係図書の前算はかなり充実しており、専門出版社の本は大体入っています。ところが、筑摩書房や角川書店など一般的な出版社から出ている専門的な本は、意外に抜けています。『兼好発掘』や『室町ごろ』など。また、院生時代に自らの研究スタイルを確立しようと読み漁った本の何冊かも、本学図書館には未所蔵でした。外山滋比古『修辞的残像』やヤウス『挑発としての文学史』など。

次に、知人にもらってもらう(押しつける)本。図書館には所蔵されているが、個人でも手元に持っていると便利そうな本は、同僚や教え子で学内に残っている人、また院生に差し上げました。新日本古典文学大系・明治篇や物語の注釈書類、『日本史広辞典』や大漢和辞典(旧版)などのツール書。

こうして、学内で活用してもらえそうな本は何らかの形で学内に残すように努めたのですが、ま

だ半数以上の行き先が決まりません。

若い頃は本を買いたくて買いたくて仕方がなく、書籍代を工面するために家族にも迷惑をかけたのですが、十年程前、ある日突然、本に対する執着が失せてしまいました。もちろん必要な本は買い続けたし、読む量も減ったわけではないのですが、手元に所持していたという執着がなくなっただけです。ただし、本を愛する気持ちまで失せたわけではないので、行き先が決まらない本についても、誰かになんとか活用してもらえるような形にしたいと考えました。

結局、残った本は古書店に引き取ってもらうことになりそうです。関係者ならばばいたい知っています。したがって、価格にこだわりはありません。ただ、本を必要とする人に届く機会になればと考えてのことです。

最後に、研究生活を送るための時と場を与えてくださった皇學館大学に心からお礼を申し上げます。ありがとうございます。

(特別教授)

節目の年に

大島信生

私が国文学科の助手として着任したのは、昭和六十二年四月であった。着任の年度の国文学科教員には、西宮一民先生、廣濱文雄先生、粕谷興紀先生、大杉光生先生、島原泰雄先生、半田美永先

生、深津睦夫先生がおられた。当時の教員では深津睦夫先生が現在特別教授としてお勤めであるが、この三月を以て退任される。深津先生には私の大学院時代からお世話になっていて御礼を申し上げる次第である。

この四月からは私が特別教授として最年長になる。以下思い出すことなど記しておきたい。

○

本学の特色ある行事はいくつもあるが、フィールドワークはその一つであろう。私が着任した当時は研究旅行と称していて、一年生から三年生までクラス単位で出かけていた。国文学科では、一年生は京都、二年生は奈良、三年生は東北に出かけることが多かった。助手の頃は三年生のコースに行くことが常であったが、現地では多いときでバス三台を連ねていた。盛岡までは新幹線で行くのであるが、当初は東京・上野間は山手線による移動で、学生が乗り遅れないように気を使ったものである。研究旅行では仙台から作並を経由して山形に行く事もあった。

平成二十三年三月十一日に齋藤平教授(当時は准教授)と共同研究で訪れていた仙台で東日本大震災に遭遇した。仙台空港発の飛行機や新幹線等の交通手段も絶たれたその夜、齋藤教授が山形空港から大阪空港行き翌日の便があることを見つけてくれた。問題はいかにして山形空港に行くかであったが、奇跡的に乗車できたタクシーに乗って作並経由で山形空港に行くことができた。研究旅行でそのルートを知っていたことが生かされることになった。

フィールドワークがゼミ単位になってからは、九州に行くことが多かった。太宰府を中心に、志賀島や唐津など万葉故地を訪ねた。

万葉集から「令和」が新元号に決定したのは驚きとともに喜びであった。令和二年二月に太宰府万葉会が「令和記念碑」を太宰府市役所に建ててその除幕式が行われた。私は参加できなかったが、大宰府万葉会で何度か講演させていただいた縁で記念碑の裏面に私の名前も刻まれた。一度学生とフィールドワークで現地に赴いてそれを見たいと思っているのだが、果たせないでいるのは残念である。

現在私が所属する上代関係の学会は、萬葉学会、美夫君志会、古事記学会、上代文学会などであるが、着任の年には、古事記学会大会が本学で開催された。これは全学挙げての行事であった。学生では当時四年生であった齋藤平教授が中心になって動いてくださった。その後も古事記学会大会は平成八年、平成二十二年、萬葉学会全国大会は平成九年、平成二十年に開催された。さらに平成三十年には上代文学会大会も本学で開催された。いずれの大会も成功裡に終えることができた。国文学科のスタッフ、また学生諸氏のお力添えに改めて御礼を申し上げたい。

平成二十一年四月からは八年間国文学科主任を務めさせていただいた。スムーズな運営ができたのも国文学科スタッフの支えがあればこそ感謝に堪えない。

平成二十九年四月からは研究開発推進センター長・佐川記念神道博物館長として六年間務め、貴重な経験をさせていただいた。殊に令和元年に開かれた特別展「天皇陛下御即位記念 即位礼と大嘗祭」は多くの来場者を集め、好評のうちに終えることができた。

ここ数年のコロナ禍により、前述のフィールドワークをはじめとする行事が開催できないことも多く、それらの行事が開催できることの有難みを改めて実感する。

この四月からは前述のように特別教授として勤めさせていただくが、感謝の心で国文学科に少しでも貢献できるように頑張りたいと思う。

(教授)

いあつひ

平石 岳

本学の文学部国文学科に、今年度から勤務することになりました。平石岳と申します。近代文学を担当します。よろしくお願いたします。楽しくも忙しい教員生活で、近頃話題になっている「教員の働き方改革」は、大学教員には適用されないのかなあ、と思う毎日です。

福岡県出身です。大学は京都で、ガラガラと十年間も学生生活を送ってしまいました。大学生のときの思い出は、もうほとんど残っていませんが、ずっと本を読んだりマンガを読んだりしていたか

と思います。アルバイトもいろいろと、肉体労働を中心にやりました。わたしの出身大学も山の中にあつたので、大学一年生の夏休みにもものすごくアルバイトをして、中古の原付を買いました。そのときに、世界が凄く広くなったように感じたのを思い出しました。ただ、本学で奉職することになり、せっかく京都に住んでいたのに、寺社仏閣をいろいろとたずねておけばよかったと思つてます。学生のみなさんも、出不精にならず、大学の学修・勉強はもちろんしっかりとしたいうえで、様々な体験をしてほしいと思います。また、四年間という短い期間ですが、大学図書館や京都の資料館・文書館で、司書職に就いていたこともありま。

一応、教員免許(国語・中高)も所持しています。わたしの授業では、近代文学史に名が残っている作家や作品を主に取り上げ、様々な角度から「文学」を考えていこうと思つています。近代日本を象徴する出版メディアは雑誌と新聞ですが、作家たちは自分の作品が雑誌、新聞、本に掲載されるにあたってどのような方策をとっていたのか、そのメディアに載ることによってどのような意義があつたのか、作家の手を離れて「文学」はどのように変容していくのか、といったテーマを扱います。

近代という時代は、夏目漱石ですら自らを「売文」者だと自嘲するように、お金(資本)と結びついて発展してきました。ただ、「お金儲けのために文学が利用された」という結論に行きついてしまふ訳ではありません。文筆によって生計を立てる作家たちは、しかし時に、採算度外視で自らの安穩な生活や命を削ってまで創作活動を行いま

した。「文学」が資本主義の論理に組み込まれるなかで、それでもなお、自らの可能性を「文学」に賭けた表現者たちの営みを、感じ取っていただけではないと思います。そして、自分自身がどのような表現に、どのような「文学」に心動かされるのかを知っておくことも、「自分」を考えるよいきっかけになるはずで。

研究としては、明治大正期の流行作家であった徳富蘆花とその文学について、いろいろとやってきました。これからもしばらく、この作家と二人三脚になるかと思いますが、仲違いしないように気を付けます。授業で話すこともつながりますが、演劇、画、ラジオ、映画などといった、文字表現以外のメディアと「文学」の関係性に興味があります。

現代日本は「おもしろい」ものが大量に生産され、消費される時代です。その時代に生きるなかで、「おもしろい」とはいったい何なのか、日本人や日本語を操ってきた人々は何を「おもしろい」と思ってきたのか、そのことを少し前の時代に遡って、みなさんと考えてみたいのです。

(助教)

委員長より

森井菜月

入学直前、新型コロナウイルスが蔓延し、私たちの学生生活も様々な変化を強いられた。そして、入学からの二年間、あらゆる学校行事が中止を余

儀なくされ、自分の中での「学生らしさ」の全体像が掴めず、大きく揺らいでいたように感じられる。

しかし、今年度から倉陵祭をはじめとする行事が再び開催の動きを見せ、ようやく日常へと向かいつつあることに安堵を覚える。

昨今、こういった影響を受け、学生であるが故にできるような充実した活動を行うことが難しいなかで、委員長という形で国文学に触れる機会を得られることは、本学に在籍するうえで大きな意義がある。

これから、自身の将来を具体的に考える時期にあたって、社会へ踏み出すまでのこの僅かな学びの時間を、先生方や仲間と共に大切に過ごしていきたい。

(三年)

上代文学研究部会活動報告

(研究ノート)

万葉歌の中の「桑子」

―「玉の緒」との関連から―

辻希乃華

なかなか 人とあらずは 桑子にも
ならましものを 玉の緒ばかり

(『万葉集』卷十二―三〇八六・作者不明)

生活に定着しているものにと寄せて詠む奇物陳思歌。右に示した歌は「桑子」―つまり「蚕」に寄せたものである。

昨年度の活動報告でもこの歌を取り上げた。その際には、当該歌の『伊勢物語』の第十四段との関連性を挙げ、「桑子」を用いた意味について考察した。その結果、単純に寿命が短いことについて「桑子」という語が用いられたのではないという考えに至った。ゆえに、『窪田評釈』の「相聞の心があるといふ程度の歌」との評は否定された。蚕になりたいと願うのには何かしらの利点があるから願うのであろうが、蚕になりたいと願う理由はいまだ明らかになっていない。また、「玉の緒ばかり」の解釈が諸注釈書によって分かれており、『略解』以降有力とされている「短いことのとえ」というものは、単に蚕の命が短いという理由に関連付けても良いのかという問題もある。これらについて再考していくこととする。

○

集中及びその他の文献に「桑子」の用例はない。ただし、記紀に「蚕」を示す「コ」の記述や、集中に「母が養ふ蚕の繭隠り」の例があるので、この時に養蚕が行われていたのは確かであろう。当該歌において、「桑子」が用いられている理由として、諸注釈書が示しているのは以下の四つの説である。

- ① 雌雄仲睦まじくいることができるから(『古義』、『私注』)
- ② 物思いをしなくて済むから(『全釈』、『佐佐木評釈』、『全注』)
- ③ 絹製品となって恋しい人の身に寄り添うものになりたいたから(『窪田評釈』)
- ④ 寿命の短い「桑子」になって、早くこの世か

ら去ってしまいたいから(『釈注』『全歌講義』)
 『井上新考』は「蠶に雌雄あらむや」と言つて
 ①の説を否定し、『全註釈』は「人間でなくて、
 短い間カイコでいたらよかつたらう」というのも
 變)だとして、作者が「桑子」になりたいと思う
 理由に深く言及していない。

②と④は、「桑子」以外にも代替が可能である
 ため、ここで「桑子」を用いる意図が掴めない。
 ①か③のどちらかであろう。しかし、①は、雌雄
 で籠もる繭の存在は非常に珍しいものであること
 に注意しておきたい。必ずしも一つの繭の中に二
 匹のさなぎが籠もるとは言い切れないのである。
 現実で人間として生きているのがつらいと嘆くほ
 どの物思いをしているのに、僅かな可能性に期待
 してわざわざ桑子になりたいと願うだろうか。物
 思いの結果、人以外のものになりたいと願ってい
 るのにも関わらず、一緒になれる可能性の低い「桑
 子」は使用しないのではないかと考える。一緒に
 になりたいのであれば、他の生物やものでも代替が
 可能はずだ。ただし③の場合、一〇八番歌、
 七二九番歌、七三四番歌、二六九三番歌などのよ
 うに、人間以外のものに成り代わって、愛しい人
 に触れたいとした用例が存在することも挙げられ
 る。ここでも、これらの歌と同様に考えた結果「桑
 子」を用いたのであろう。③の説を支持する。

○

「玉の緒ばかり」の集中の用例は、当該歌と
 三三五八番歌のみである。「玉の緒の」という枕
 詞は「短し」に続くということの関連から、諸注
 釈書は「短いことのとえ」であると解していた。

『窪田評釈』のみ「玉の緒」そのものの意で捉え
 ており、「玉を貫く緒は、強く、美しいものにし
 よう」として、絹糸を縫つて作つたものと見える。
 その意で、せめて玉の緒だけでもなりたいたい意
 との説明がある。『時代別国語大辞典上代編』でも、
 「①玉を貫き通す緒。または、玉を緒に貫いたもの。
 ②靈魂の意とも、生命の意とも、短いことの譬え
 ともいうが、未詳」とあるので、双方の説が立証
 されるのは確かである。当時、絹糸を使用した衣
 服や物品は貴族などに献上され、自身で使用する
 ものではなかったということ踏まえても、身分
 差があったことや、わずかな部分でも愛しいと思
 う人に触れることができれば良いと考えていたこ
 とが推測できる。「桑子」との関連からも、僅か
 な面積でも触れることができる「玉を貫き通す緒」
 であると解する方が適切である。

○

以上のように、「桑子」になりたい理由としては、
 絹製品となって恋しい人の身に寄り添うことができ
 るから蚕になりたいと願つたのである。一方「玉
 の緒ばかり」は、玉を貫き通す緒であるとの意が
 最も適切である。当該歌の解釈としては、「なま
 じつか人間でなくて、絹糸を吐き出すことのでき
 る蚕にでもなりたいたいものだ。せめて玉を貫く緒と
 なつて恋しいあなたのそばにいたい」などとす
 るのが適切であると考えられる。蚕そのものになるとい
 うよりも、糸を生成して絹製品になることができ
 るから蚕になりたいと願っているのである。

(四年)

中古文学研究部会活動報告

杉本優奈

本年度の中古研究部会は、四年生二名、三年生
 二名で、春学期は毎週火曜日の四講時目に、秋学
 期は毎週月曜日の三講時目に活動しています。活
 動内容は、古典文学を読み、段落ごとにメンバ
 ーで現代語訳を行い、それぞれがどのように感じた
 のかを、意見交換しています。春学期と秋学期の
 中盤までは「女」が語る平安文学(和泉書院を、
 それ以降は『堤中納言物語』(新潮日本古典集成)
 の「虫愛づる姫君」)を用いて行っています。

『女』が語る平安文学』は『無名草子』を題材
 として中古文学の研究手法を学ぶという趣向の教
 科書です。『無名草子』では、様々な物語や勅撰
 集などの素晴らしい点や、良くない点を、女性た
 ちが辛口に批評しています。中でも興味深かった
 のは、第八講の「失われた物語たち」です。この
 講では、現在に伝わることのなかった、いわゆる
 散逸物語の『海人の刈藻』と、『末葉の露』の評
 価が書かれています。

『海人の刈藻』は、「しんみりと優美なところは
 ないけれど、言葉遣いなども、『栄花物語』をと
 ても真似していて、しつかりとしている作品だ」
 と言われています。また、前半の文章から、「物
 語の出来に比べ、しみじみとした趣もある」と評
 されており、女たちが生きていた時代での『海人
 の刈藻』の評価が窺えます。その後、『海人の刈藻』
 の登場人物について触れられ、中でも、主人公の

兄である権中納言が、琵琶を弾きながら、『法華經』の「化城喻本」の一説にある、「從冥入於冥永不開仏名」（冥きより冥きに入りて永く仏名を聞かず）と口ずさんでいる様子は素晴らしいと言っています。話は進み、権中納言から関白殿、大將殿の批評へと移ります。二人は、天皇の姉妹たちの美しさに目移りしないので、その様子は物足りないと言われています。私としては、男性が他の女性に目移りしないことは良いことだと思えます。ですが、この批評している女性たちは、緊張感を求めているので驚きました。現代と同じように、「物語」や「小説」だからこそ、ドラマチックな展開を求めるところは、現代と通ずるものがあると感じました。その後、権中納言が即神仏になったことに対し、『夜の寢覚』で主人公が仮死状態になった時ほどの「口惜しさ」だと評価しています。なかなか厳しい評価だと感じました。また、この会話から、当時の『夜の寢覚』への評価がわかるので、『無名草子』を通して、現在に伝わる物語の評価がわかることは、非常に興味深かったです。

『末葉の露』は、「言葉遣いなどは全くの平凡なようだ」と言い、いきなり辛口な評価から始まります。ここでは最初に、源中将の様子が語られています。「皇太后は、氣立てなど返す返す優れていらつしやり、中でも源中将は皇太后側の人々に数えられ、奥ゆかしい人です」と、人物の評価が高い一方、物語の展開の評価はあまり良くありません。それは、宰相中将が記憶喪失になると言う展開です。彼は、病がよくなり参内した際、源中

將に出会いますが、ちらっと見て、ただ腰をかかめるだけの会釈をして通り過ぎました。この様子には、語り手である女たちは「癪にさわる」や「物の怪の仕業ですが、宰相中将の心が、ひたすら変わってしまったのは、大層呆きれもし、哀れだ」と、女たちの、非常にがっかりした様子が見て取れました。

しかし、辛辣な評価ばかりではありませんでした。物語の展開にがっかりしていましたが、「おもしろい」箇所もあると評価しています。例えば、「偉い僧がひどく酔っ払っている様子が、「おもしろい」と言っています。「偉い人」や「立派な人」など、普段はしないであろうことを、お酒の力により醜態を晒すという展開は、現代の物語や小説にもあります。昔の人と、現代の人が感じる「おもしろい」と思う部分は、共通しているのだと思います。

このように、『無名草子』を読むことによって、「散逸物語」の評価だけでなく、現代にも伝わっている、物語や勅撰和歌集などの評価を知ることができました。私が知っていたのは、物語や勅撰和歌集の「内容」だけで、昔の人々がそれらについて、「どのように思っていたのか」までは知りませんでした。内容はもちろんですが、昔の人々の考えに触れることができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。

平安文学に興味のある方は、ぜひ参加してみてください。新たな発見や気づきに出会えるはずですよ。
(三年)

近世文学研究部会活動報告

〈研究ノート〉

『先代旧事本紀』 享受の一齣

兒島靖倫

『先代旧事本紀』という、全十巻からなる史書がある。天地開闢から推古朝までの歴史が記述されており、『古事記』『日本書紀』には見られない独自の伝承や神名などが確認できることから、いわゆる神道古典として、古来より重要視されてきた。特に吉田神道で『三部本書』の筆頭とされてからは、『古事記』『日本書紀』よりも尊重される存在になる。

ところが、近世期に『先代旧事本紀』の評価が一転した。本文の大部分が『古事記』『日本書紀』『古語拾遺』の文章を綴り合わせたような内容であることや、序文と本文の内容に齟齬があるなどの問題点が、本居宣長らによって次々と指摘されたのである。その結果、なごらく「現存する最古の史書」として重大視されてきた神道古典は、一変して「偽書」と見なされ、遂には顧みられなくなってしまう。実際、近代以降における『先代旧事本紀』の認知度は、『古事記』『日本書紀』と比較して極端に低い。

しかし、足かけ三〇〇年、偽書とされてきた『先代旧事本紀』の価値は、頃年の研究によって再評価されつつある。とりわけ享受史の視角から研究がなされるようになって以降、『先代旧事本紀』は改めて脚光を浴びるようになっていった。

い。偽書には偽書なりの価値を有しているのである。それは決して荒唐無稽で済まされるようなものではない。

以上を踏まえて本報告は、近世期における『先代旧事本紀』享受について、その一端を示すことにする。なお、以下においては便宜を図って『旧事紀』と呼ぶ。

近世期の『旧事紀』享受について、用例として藤重匹龍の『掌中古言梯』（文化五年刊）を取り上げる。これは楫取魚彦の『古言梯再考』を下敷きにして編纂された辞書体文献である。以下、便宜を図って〈掌中本〉と呼ぶことにする。

〈掌中本〉には、全部で四五九一語が掲載されている。その採録された語彙に、「おもしろき」と「ちはひ」という語彙があり、いずれも『旧事紀』を出典としている。

まず「おもしろき」は、「心ニカ、ルヤウノコト 紀」於母之棲枳 万 怜何^メ面白 古語拾遺同 舊事紀同 靈異記と説明されている。紀は「日本書紀」で、万は「万葉集」のことであるが、ここで注目したいのは、「古語拾遺」と『旧事紀』である。『古語拾遺』には「阿那於茂志呂」とあり、『旧事紀』には「阿那於茂斯侶」（巻第二「神祇本紀」）とある。漢字表記に異同が見られるが、いずれも天岩戸説話に見られる語彙であり、引用箇所と思しき文章も似通っている。『旧事紀』が「古語拾遺」を踏まえていることは、数多くの先行研究も指摘しているが、そのことが窺える記述といえる。

次に「ちはひ」は、「神号^メちひノ通ヒニテいはふ歟 紀乳速日神 万 女ノ神モチハヒ給ヒテ又 靈チハフ神モ 註備後国三谿郡知波夜比ノ神」と説明されている。ここに『旧事紀』は確認できないが、問題は「乳速日神」である。先述したように、紀は『日本書紀』のことであるが、そもそも『日本書紀』に「乳速日神」は登場しない。それでは、この紀は一体何か。「乳速日神」は『旧事紀』の巻第三「天神本紀」のみに登場する神である。

つまり、この「ちはひ」の紀は『日本書紀』でなく、実際は『旧事紀』を指す。これは編纂上の誤謬と思われる。

右に取り上げた語彙のうち、「ちはひ」は山田常典の『増補古言梯標註』（弘化四年刊）にも引き継がれている。しかし、その説明は「万 千羽日 ○ 左部さきはひの処に出」となっており、〈掌中本〉とは内容が大きく異なる。『増補古言梯標註』が例示する文献資料は、『万葉集』（巻九・一七五三番歌）のみで、『旧事紀』は削除されているのである。このことから、「匹龍は『旧事紀』を認めていたが、常典は『旧事紀』を認めていなかった」という仮説を立てることができる。世間に偽書説が浸透していた可能性も否定できないが、現時点では措くことにする。

以上、〈掌中本〉における利用を事例に、『旧事紀』享受について検討してきた。現段階にて確認する限り、少なくとも〈掌中本〉において、『旧事紀』は神道古典として利用価値が認められていたと考えられる。

（博士後期課程）

近代文学研究部会活動報告

中村始桜・西 美雪・森 涉遥

研究部会が開始して、最初に扱った内容は、主に戦争詩に関連するもので、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」をはじめとした、複数の作品と作家について取り上げた。

具体的には、戦時中「雨ニモマケズ」の内容が、当時の米配給の状況に合うよう書き換えられたり、滅私奉公の手本のように利用されたりした、というものである。

恥ずかしながら、それまで「戦時下の日本において、詩がどのように扱われたのか」という視点を持っていなかったが、良い機会を得たことで、新たなものの見方が自分の中に生まれたように思った。

件の詩は、小学校の教科書にも取り上げられる、言わずと知れた作品である。しかし、受け手によって作り上げられた印象や、詩を利用する立場の人間によって付与された、作者の意図していない意味が、作品の浸透に深く関わっている場合があることを知った。

今、誰もが知る「雨ニモマケズ」がここまで有名になったのも、歪んだ経緯を辿った結果なのかもしれないと考えると、作品自体の価値を捉えることは簡単ではないと実感した。

その次は、「桃太郎 海の神兵」（監督・瀬尾光世、昭和二十年）による「戦争」と「桃太郎」の二つの関係性の分析といった活動を行った。

はじめに、「桃太郎 海の神兵」の内に込められた当時（戦時下）における「桃太郎」という存在の在り方について、「桃太郎」という作品を綿密に分析することにより理解した。その中で、「桃太郎」という作品に、正で邪を滅ぼそうとする根底的なイデオロギーが見られることを知った。また、桃太郎がキビタンゴを与え、犬、猿、キジを仲間にする描写では、食べ物の贈与による権力関係や人間による動物を始めとする「自然」への支配的姿勢が見られることが分かった。

「桃太郎」の分析後は、実際に「桃太郎 海の神兵」の鑑賞を行った。特に印象に残ったのは、多くの動物に歌を交えながら日本語を教育するシーンである。このシーンは戦争の最中、日本が実際に占領下の国々で行った「日本語教育」を思わせるものである。今では、その国の伝統・文化を破壊する非人道的行為だが、本作でも見られるように歌を交え、楽しそうな表現にすることにより日本の行っている侵略的行為の正当性を主張していると感じられた。

鑑賞後は、個々の場面の戦争描写と「桃太郎 海の神兵」が作られた背景に関する分析を行った。本作が作られた背景としては、一九四二年九月十日に、陸海軍両省、外務省、内閣情報局関係者による「南方映画工作処理要領」（国立公文書館所蔵、昭和十七年内閣雑纂）によって上海などの「外地」特に、「南方」の国での映画による上映が「文化工作」の方針で定められたからであることが分かった。

今も多くの人が認知している「桃太郎」。しかし、

その物語の本質が単純かつ曖昧であるがゆえにその時代の思想に上手く利用されるのではないかと非常にいたましく、また、興味深く感じた。

秋学期には、メディアミックスをテーマに村上春樹の『女のいない男たち』所収の「ドライブ・マイ・カー」「シェヘラザード」「木野」を読み、映画『ドライブ・マイ・カー』を観た。原作を読んでから映画を観たことで、初めに受けた印象はとにかく物語が長いというものだった。今まで小説の映画化というと、映画の尺に収めるために短くしたという作品しか観たことがなかったため、いい意味で映画化に対する考え方が変わった。原作にないシーンが増えたことで全く違う話になったという印象は映画を観ている時にはなかったが、観た後に冷静に比較すると意外と違う話になっていくという不思議な感覚が味わえる作品だった。一口に映画化と言っても奥が深いものであるということを変更して実感できた。

(二年・二年・一年)

国語学研究会活動報告

打田楓茄・谷川奈穂

ここ二年ほど『伊勢市史』をどのように伊勢市民の皆様が読んでもらえるか、という課題に引き続き取り組んだ。

この中で、〈近世編〉の御師のメニューにたびたび「あわび」が登場することに気付いた。「あわび」は今でも高級食材であるが、①どうやって入手し

たか、②どのように参宮客に提供されたか等、疑問が尽きない中で、そもそも「あわび」の味はどのようなものかということになった。

メンバーのうち、一人がこれまでに「あわび」を食べたことがないことがわかり、さっそく食べてみることにした。

しかし、生の「あわび」を入手してもどのように調理してよいかもわからず、また、どこで入手できるかが問題となった。そこで、市内で販売されている煮付けた「あわび」を試食することにした。

「あわび」一個の値段は、驚くほどのものであったが、部会費を使って購入した。袋から出して、数ミリほどの薄さにスライスして食べてみた。

- ・ しっかりと味がついていておいしい。
- ・ 思ったより柔らかい。
- ・ 噛むと味が染み出す。
- ・ しつとりとした味わい。
- ・ お土産にも最適。

こうした感想を出し合ったが、私たちが食べたものと同じものを参宮客に提供されていたわけではなく、また、いわゆる「食レポ」としてもかなり不十分な感想であったと思う。

また、「あわび」の味がどのようなものかは、表現できておらず、何を食べたのが全く分からないものになってしまった。

感じたことを言語化することが、これほどむずかしいこととは思っていなかっただけに、コストパフォーマンスという点では、一コメント千円という高級なものになってしまった。

こうしたときに、オノマトペで表現できればよいと思つたが、出てくるものは、

- ・クニクニユ
- ・クチャクチャ
- ・シコシコ
- ・ネチャネチャ
- ・ハミハミ

などで、実感を明確に示せるものはなかった。

状態を言語化するという作業は思つた以上に複雑で、さらに、その表現から、「あわび」を食べたことを同感してもらえないのは非常に困難だと感じた。

今後は、伊勢市の「広報いせ」で連載企画として、『伊勢市史』にちなむ話題を掲載させていただく予定である。卒業までに原稿を完成させたいと考えている。

(四年)

漢文学研究部会活動報告

井上幸之佑・中野 瞳

漢文学研究部会は、現在、国文二人・国史二人の四人で、隔週水曜IV時限に松下先生の研究室で行われている。本年度の研究部会では、昨年引き続き『韓非子』二柄篇を輪読している。参加者が史料を予め書き下し文にし、口語訳を行ったものを全体で共有し、進めていく形式である。

この研究部会では江戸時代出版された宋代の覆刻本を用いている。高校時代に我々が学習した

訓読文だけではなく、合字が用いられていたたり、白文で書かれた割注があつたりと新たに学ぶことが多い。参加者の中には、「読みにくい、訳しがいがあり面白い」という感想を持つ者もいる。

以下、『韓非子』の紹介及び二柄篇の紹介をもつて活動報告をしたい。

作者の韓非という名前を聞いたことがなくとも、「逆鱗」や「矛盾」のような故事成語は高校の古典で学んだことがあるのではないか。彼は法律を重視した法治思想を聞き、秦の時代に活躍したとされる。

彼は、私情を含んで政治を行うことは悪であり、権力は君主が一元的に管轄し、言行一致を徹底して行うことを主張した。このように聞くと、冷酷で、無情で、ドライで、そして硬くて読みにくい文章なのではないかという印象を抱くかもしれない。しかし、そのようなことはない。作中にはくどいほど比喩や対句や失敗例が記される。しかも、それらの表現がわかりやすく、一つの主張に最低一つ以上の比喩や失敗例が書かれている。余りに多くの比喩や失敗例に、教授が「くどく説明されている分、読みやすい」と苦笑いされる程である。

韓非は「法」「術」「勢」を重視した。これは「君主権の強化」「富国強兵」「治安維持」「国を運用するためのシステム」「飴とムチの運用方法」につながつてこよう。

さて、先ほど述べたとおり、今年度の研究部会は二柄篇を読んでいる。この中では「二柄」と「言行一致」が説かれている。「二柄」とは、「刑罰と恩賞」乃ち「飴とムチ」のことである。文中には、

それらは君主自らが行使すべきであると書かれており、どちらかを他人に行使させる権利を与える。と君主の地位を脅かすものとして述べられている。「言行一致」とは、発言と行動の一致のことである。

ここで、二柄篇に見える話を一つ紹介したい。酒に酔つて極寒の中で眠っている昭侯を可哀そうに思つた冠係の家臣が毛布を掛けた。目を覚ました昭侯は、「誰が毛布を掛けたのか」と問うと、「冠係だ」と家臣は答えた。その報告を聞いた昭侯は、服を掛けなかった服係を職務怠慢で、また、服を掛けた冠係を越権行為で処罰した。またその際に、「寒いことは悪いことであるが、役職を守らない家臣を見逃しておくことはより一層悪いことである。」とも発言している。我々の感覚からすると、「それくらいのことでは処罰をするなんて」と思うが、韓非からすると、そういう小さなことこそきちんと対処しなければ国が崩壊しかねないと考えているのである。この話は、先ほど述べたうちの「君主権の強化」「国を運用するためのシステム」を伝えようとしたのであろう。

漢文は漢字で書かれており、一文字一文字に意味がある。その一文字に込められたメッセージを読み解いていくこそが、漢文を読むときの醍醐味であるのだらうと私は感じる。その一方で漢文を読んでいて苦労するのは、漢文の多くは古代中国で作られたものであるから、本格的な注釈書や解説は現代中国語で書かれていることだ。予習の際、個人的にわからない箇所を解決するために図書館の書庫に足を運んで注釈書を探す。やっと

の思いで注釈書を見つげ出すものの全部中国語で直ぐには読めない……。泣く泣く閲覧室に戻り、中国語の辞書を頼りに自力で訳してみると、疲れよりも達成感の方が大きい。参加者が「読みにくい、訳しがいがあり面白い」と言っていたことを自ら実感した瞬間である。二柄篇もあと少し。全力で食らいついて意欲的に読み進めていきたい。

(二年)

文学館・メディア史研究部会活動報告

西潟史有香

文学館・メディア史研究部会は岡野裕行先生のご指導のもと、春学期は金曜日五限目、秋学期は木曜日四限目に活動した。参加者は二年生二名であった。今年度は「文学散歩」をテーマに二冊の本を読み、話し合った。

春学期は野田宇太郎の『東京ハイカラ散歩』（平成十年、角川春樹事務所）を読んだ。野田宇太郎は「文学散歩」ということばを創案した人物である。一九五〇年十二月に始まった「文学散歩」は現在の広く親しまれているものとは異なっていた。

古きものは減じる、それは自然の理である。新しいものは古びる、これも自然の理である。私はよしないことを繰り返すつもりはない。減び去ったものならば、それを蘇らせ

ても詮ないことである。然し、それらの歴史は本当に減び去り古び去ったものだろうか、と私は反問する。否否！もし減び去ったものだとすると、減び去ったものを知らなければ、生々流転の法理さえ、私には納得出来そうもない。

このようにして「文学散歩」を思い立ったと述べている。当著書は戦中、戦後の焼跡や変わりゆく東京、文学者の遺宅や墓地、ゆかりの地などを歩き、そこでのエピソードや詩、散歩中の会話文を交えて書かれている。

各章のはじめに第一コースから第四コースまでの簡略化された地図が挿入されており、野田宇太郎がどのように歩いたかが示されている。その地図と現在の地図を見比べ、位置の確認や当時と現在の変化を見た。現在では取り壊されてしまったものや移築されたもの、住宅街やホテル街となった場所に未だひっそりと佇んでいるものなど、地図を見比べることが多くあった。「東京は坂と水と、水に架かる橋の都」と書かれているように、本文でも多くの坂と橋の名前が文学者とともに登場している。土地の特徴は近代文学の特徴や性格ともかかわっており、山ノ手で自然主義が興り、下町で芸術至上主義が興ったことを指摘している。当著書を通して地図を見る、実際に歩くという重要性に気づかされた。『東京ハイカラ散歩』は野田宇太郎の思いや感情が表れており興味深いものであった。特に文学者の墓地に関する文章は墓石の質感や華美であるなど批評を述べており、興味をもった。

秋学期は永井荷風の『日和下駄』（平成十一年、講談社）を読んだ。春学期で読んだ『東京ハイカラ散歩』では本文に『日和下駄』の名前が登場し、影響を受けたことがわかる。『日和下駄』は大正時代ははじめの変化が激しい時代に書かれたものである。序文では、

見ずや木造の今戸橋は蚤くも変じて鉄の釣橋となり、江戸川の岸はせめんとにたためられて再び露草の花を見ず。桜田御門外また芝赤羽橋向の閑地には土木の工事今將に興らんとするにあらずや。昨日の淵今日の瀬となる夢の世の形見を伝へて、拙きこの小著、幸に後の日のかたり草の種ともならばなれかし。

というように変化する儂い東京の風景を書き残したいという思いが書かれている。東京市中を散策した当著書は「日和下駄」「淫祠」「樹」「地図」「寺」「水 附渡船」「路地」「閑地」「崖」「坂」「夕陽 附富士眺望」の十一章で構成されている。裏町や横道を好み、嘉永版の江戸切絵図をもって、「ぶらぶら歩き」と称する永井荷風の散策は、西洋化が進み失われてゆく江戸の風景を求めているように感じられた。

今年度は「文学散歩」をテーマに二冊の本を読んだが、どちらも変化の激しい東京で失われてゆく街並みについて書かれていた。永井荷風は江戸の風景を求めて興味のまま散策するもので、野田宇太郎は近代文学の足跡を求めて散歩している印象が強かった。

来年度は雑誌『文学散歩』を中心に活動する予定だ。(二年)

令和四年度

フェイールドワーク旅程記録

〔学部四年生〕(令和四年八、九月実施)

奈良・飛鳥

引率 大島教授

目的

●上代文学の基盤である奈良・飛鳥の風土に触れ、作品の理解を深める。

日帰り(九月六日(火)) 宇治山田駅++松阪駅++大和西大寺駅 || 平城宮跡歴史公園(朱雀門・復原事業情報館・第一次大極殿・平城宮いざない館など) || キトラ古墳・四神の館 || 高松塚古墳・壁画館 || 石舞台古墳 || 奈良県立万葉文化館 || 大和八木駅++宇治山田駅

三重県多気町・熊野市・和歌山県新宮市

引率 齋藤教授

目的

●言語調査の具体的手法を臨地面接調査を行うことによつて学ぶ。

●調査圏域の文化について、圏域ゆかりの作家・民俗資料などをおして理解する。

日帰り(八月二十一日(日)) 宇治山田駅 || 皇學館大学 || 《伊勢・紀勢自動車道》 || 勢和多

気IC || 丹生・ふれあいの館(言語調査) || 《紀勢道・熊野尾鷲道路》 || 熊野大泊IC || 熊野市花乃窟・お綱茶屋駐車場・花のいわずや亭(昼食) || 熊野市中里(言語調査) || 熊野速玉大社(自

由参拝) || 佐藤春夫記念館(見学) || 徐福公園(見学) || 《熊野尾鷲道路・紀勢道》 || 奥伊勢PA(休憩) || 《紀勢道・伊勢道》 || 松阪IC || 松阪駅 || 宇治山田駅 || 皇學館大学

京都

引率 吉井助教

目的

●平安文学ゆかりの地を訪れ、文学と現代との繋がりを説明できるようにする。

●自らの体験を通し、平安文学作品や当時の文化について説明できるようにする。

日帰り(九月二十五日(日)) 宇治山田駅++《近鉄特急》++京都駅 || 京都御所(見学) || 冷泉家住宅(外観のみ見学) || 廬山寺(見学) || 京都市内・西陣織会館(昼食) || 《高速利用》 || 源氏物語ミュージアム(見学) || 宇治上神社(通常参拝) || 平等院(見学) || 近鉄丹波橋駅++《近鉄特急》++宇治山田駅

〔学部三年生〕(令和五年二月実施予定)

長崎県長崎市

引率 上小倉教授・齋藤教授・松下教授

目的

〔上小倉教授〕

●異国の窓口であった土地の文化受容の様子や発展を学習する。

〔齋藤教授〕

●長崎県方言圏のことばに触れ、その特性につ

いて考える。

●言語調査の具体的手法を臨地面接調査を行うことによつて学ぶ。

●調査圏域の文化について、圏域ゆかりの作家・民俗資料・自然景観などをおして理解する。

〔松下教授〕

●中国に関係する実際の文物に触れることで、中国の歴史文化、及びその日本との交わりを体感する。

第一日(令和五年二月二十四日(金)) 宇治山田駅++《近鉄特急》++名古屋駅++《東海道・山陽新幹線》++博多駅++《特急・西九州新幹線》++長崎駅 || 出島(見学) || 新地中華街(旧唐人屋敷・言語調査・夕食) || 宿所(泊) 第二日(二十五日(土)) 宿所 || 軍艦ミュージアム(軍艦島(見学) || 四海楼(昼食) || 孔子廟(見学) || 大浦天主堂・グラバー園(見学・言語調査) || 長崎卓袱料理「浜勝」(夕食) || 宿所(泊)

第三日(二十六日(日)) 宿所 || 崇福寺(拝観) || 興福寺(拝観) || めがね橋(見学) || 長崎駅(昼食) ++《特急・西九州新幹線》++博多駅++《東海道・山陽新幹線》++名古屋駅++宇治山田駅

関西(大阪・京都・奈良)

引率 大島教授・吉井助教・平石助教

目的

●国文学に関わる大阪・京都・奈良の風土に触

れ、作品の理解を深める。

●大阪・京都・奈良という土地が、どのようにして「文学化」されたのか、その有り様を体感し、文字だけではわからない文学の成立要素を説明できるようにする。

- 第一日（令和五年二月二十五日（土））宇治山田駅
 - 皇學館大学
 - 伊勢西IC
 - 《伊勢道》
 - 伊勢関IC
 - 《名阪国道》
 - 針テラス（休）
 - 《名阪国道・西名阪道・近畿道》
 - 長原IC
 - がんこ寿司平野郷屋敷（昼食）
 - 住吉大社（正式参拝）
 - 《阪神高速利用》
 - 大阪城公園バス降車場・大阪城天守閣（見学）
 - NHK大阪放送局（見学）
 - 森ノ宮IC
 - 《阪神高速・近畿道・第二京阪》
 - 鴨川西IC
 - 宿所（泊）
- 第二日（二十六日（日））宿所
 - 大原野神社（自由参拝）
 - 十輪寺（拜観）
 - レストラン嵐山（昼食）
 - 嵯峨野・嵐山フィールドワーク
 - レストラン嵐山駐車場（集合）
 - 南禅寺・順正（夕食）
 - 宿所（泊）
- 第三日（二十七日（月））宿所
 - 第二京阪・京奈和道
 - 平城宮跡歴史公園（第一次大極殿・平城宮いざない館など見学）
 - 柿の葉ずし・ヤマトあすか店（昼食）
 - キトラ古墳・四神の館（見学）
 - 高松塚古墳（見学）
 - 飛鳥寺（首塚の見学）
 - 道の駅「宇陀路室生」
 - 伊勢中川駅（一部下車）
 - 宇治山田駅
 - 皇學館大学

令和三年度

博士論文目録

（令和四年一月二十八日授与）

地震津波記念碑の社会言語学的研究 齋藤 平

令和三年度

修士論文目録

（令和四年三月授与）

仙覚『萬葉集註釈』の研究 池上 遥平

『晋書』天文志の研究 久 知嗣

令和三年度

卒業論文目録

（令和三年九月卒業）

ライトノベル研究 一井 俊輔

『蒼山サグ作品の意図と傾向』 大形 祐太

幼児語の研究 奥井 健太

食べ物にまつわる方言 楊 瑩

『おくの細道』の研究 劉 瀟瀟

大伴家持の研究 劉 瀟瀟

（令和四年三月卒業）

芥川龍之介論 山下 瞭

「浦口」姓の起源と分布 浦口阜二郎

宮沢賢治研究 中森 志穂

文学資料の研究 天野 史業

鈴鹿市方言の研究 市川 栄輔

文学的空間について 市川 桃子

南北朝時代の書について 伊藤 芽生

一隸楷の過渡期における書法 今西 奏人

紀宝町の文化に関する言語研究 井森 愛海

『補江総日猿伝』の成立と展開 岩瀬映伊美

『博物志』と『清平山堂話本』との比較を通じて 岩田 好生

「范巨卿鶏黍死生交」について 岩田 好生

「范巨卿」と「山陽死友伝」 岩田 好生

「源氏物語」須磨巻における「ひとりごと」——繰り返される独り言—— 岩田信太郎

文学における植物の研究 上谷 実奈

一桜から見る文学と園芸文化の関わり—— 榎本 文哉

吉川英治訳『水滸伝』について 大石 拓海

外来語の表記研究 大石 拓海

——チとテイの表記について—— 大西 舞

米芾について 岡野 未空

谷山浩子研究 小倉 みき

鳥羽市石鏡町方言の研究 小倉 みき

谷崎潤一郎「痴人の愛」研究	尾崎 咲良	「君たちはどう生きるか」について	中西 清歌	『万葉集』における梅花の宴の研究	宮城 明莉
数学語法の研究	尾崎 里奈	—理想の人間関係—		色彩語の研究	宮崎 淳子
読解力と読書活動の関係についての研究	風間 千明	—大塚から小塚への移り変わり—	中野 勇	—空色と水色について—	
隷書について	金屋 香穂	南伊勢町賢浦の波浪に関する方言研究		人麻呂歌集の研究	宮田英里奈
—横画と右払いにおける波磔の変遷—				—巻七、二四七〜二五〇歌を中心に—	
図書館とセクシャルマイノリティ	安藤真莉夜	明和町の言語研究	西川 貴善	泉鏡花『外科室』について	宮原あすな
太宰治についての研究	川田 凌雅	—農業用語を中心に—	西口 祥伍	—『夜行巡査』との比較を通して—	
二次創作・同人誌の研究	川村 花音	食文化語彙の構造に関する研究	西田 紀香	三重県方言と周辺域の言語研究	宮村 夏海
伝承文学の表現構成の研究	近藤 響介	—黄庭堅について—	萩原 麻衣	蘇軾について	村尾 奏
飛騨地方の言語研究	後藤 優真	—黄庭堅の求めた書—	服部 唯花	森鷗外『高瀬舟』論	村上 諒
有川浩研究	坂 信哉	造像記について		上代文学作品にみる狐について	村瀬 右京
金文について	櫻井 希	—龍門二十品に見る筆法の分類—	東久保悠斗	文末詞「やん」の用法の拡大についての研究	村田ひかる
—字形の変遷と地域性—		芥川龍之介『雨車』研究	福島 和	小公女の翻訳史	森口 彩
三重県方言の研究	塩崎 天人	—「雨車」についての考察—	福田 和真	漢文教育における『論語』	籾本 莉子
—ホルとホカスの境界線を中心に—		山上憶良の七夕歌	藤本かなえ	—明治十年代・二十年代を中心に—	
斎宮女御徽子女王の生涯と和歌	正後 陽菜	電子書籍の研究		中古文学における鳥	山口 真幸
—二度目の伊勢下向の決意—		『とりかへばや物語』における		王昭君について	山根 希晴
日本語オノマトベの研究	庄山 美有	「はなばな」について		—異民族に嫁いだ皇女たち—	
医療現場の言葉についての研究	杉浦 貴俊	文学における表現の自由	堀口 莉緒	文学作品に描かれた病の研究	山本 峻也
東海三県域の言語研究	鈴木 笑華	三重県方言の位置付けに関する研究	前田 結菜	ネット小説の研究	山本 遊
西尾維新論	鈴木 寛之	『西遊記』について	松田 麗	鳥蟲篆について	湯浅 茅咲
方言敬語の研究	鈴木 寛之	鹿兒島方言の研究	松田 有理	伊勢市二見町の言語研究	吉井 清治
語源の研究	鈴木 寛之	小川洋子作品の女性論	松田 理沙	—風の名称について—	
伊勢地域の言語研究	鈴木 寛之	太宰治論	松永 貴大	色彩語の研究	吉川 嶺音
紀女郎の研究	塚田 舞香	—小説『津軽』の描かれ方—	松原 隼斗	オノマトベの史的 research	吉澤 孝則
北海道方言の商用利用の研究	筒井 美有	佐藤春夫の研究		—方法としてのオマーージュ—	李 紫音
三重県方言の文法的 research	中川 晴貴	—方法としてのオマーージュ—	松本 望	王羲之について	若林 潤
源氏物語の斎宮	中川 眞宏	星と和歌	水岡 昂大	—様々な視点から見る人物像—	
—秋好中宮の教養を中心に—		文字デザインの research			

『とりかへばや物語』における楽器の役割

川口 奈緒子

令和三年度卒業論文報告

岡野裕行

令和三年度末の卒業論文提出者は八十四名で、提出に至らなかった者が六名（休学者は除く）となった。提出された論文の評価は、秀が一名、優が十八名、良が三十八名、可が二十七名で、不可はいなかった。なお、九月提出者は五名で、その評価は、優が二名、良が一名、可が二名であった。優秀論文に選ばれた上位十名の題目は次の通りである。①李紫音「虞美人伝説について」、②岩田信太郎「『源氏物語』須磨巻における「ひとりごと」―繰り返し返される独り言―」、③楊瑩「『おくの細道』の研究―「日光」・「松島」・「象潟」における漢詩の受容―」、④上谷実奈「文学における植物の研究―桜から見る文学と園芸文化の関わり―」、⑤藤本かなえ「『とりかへばや物語』における「はなばな」について」、⑥松本望「星と和歌」、⑦岩瀬映伊美「范巨卿鶏黍死生交」について―「范式伝」と「山陽死友伝」、『雨月物語』「菊花の約」との比較―」、⑧宮原あすな「泉鏡花『外科室』について―『夜行巡查』との比較を通して―」、⑨金屋香穂「隷書について―横画と右払いにおける波磔の変遷―」、⑩筒井美有「北海道方言の商利用の研究」。以上。

(准教授)

令和四年度 講義一覧

〔文学部〕国文学概論ⅠⅡ（田中康二・平石岳）
 ／国語学概論ⅠⅡ（齋藤平）／漢文学概論ⅠⅡ（松下道信）
 ／国文学史概説Ⅰ（大島信生・吉井祥・深津陸夫）
 ／国文学史概説Ⅱ（田中・平石・岡野裕行）
 ／古典文学講義ⅠⅡ（大島・吉井・深津・田中）
 ／近代文学講義ⅠⅡ（平石・岡野）
 ／国語史概説ⅠⅡ（齋藤）
 ／古典文学講義ⅠⅡ（大島・吉井・深津・田中）
 ／近代文学講義ⅠⅡ（平石）
 ／国語学講義ⅠⅡ（齋藤）
 ／漢文学講義ⅠⅡ（松下）
 ／専門演習ⅠⅡⅢⅣ（大島・吉井・田中・平石・岡野・齋藤・松下・上小倉一志）
 ／プロジェクト研究ⅠⅡⅢⅣ（大島・吉井・田中・平石・岡野・齋藤・松下・上小倉）
 ／言語表現学概論ⅠⅡ（濱畑静香・齋藤）
 ／国文法概説ⅠⅡ（大島）
 ／日本語教授法（濱畑）
 ／社会言語学（齋藤）
 ／図書館概論（岡野）
 ／情報資源組織論（千邑淳子）
 ／子どもの本と児童サービス（海上和美）
 ／図書館情報資源概論（岡野）
 ／読書と豊かな人間性（箕浦龍二）
 ／書物と図書館の文化史（岡野）
 ／芸能論（前田憲司）
 ／日本文化史ⅠⅡ（C・メイヨー）
 ／世界宗教史ⅠⅡ（中山千里）
 ／日本宗教史（多田實道）
 ／書論・鑑賞（上小倉）
 ／書ⅠⅡ（上小倉）
 ／書ⅢⅣ（岡野史）
 ／書ⅤⅥ（山本のり子）
 ／書ⅦⅧ（上小倉）
 ／卒業論文（大島・吉井・田中・平石・岡野・齋藤・松下・上小倉）
 〈大学院 国文学研究基礎論（深津）
 ／国文学研究法演習（深津）
 ／古典文学特殊講義ⅠⅡ（大島・深津・田中）
 ／国語学特殊講義ⅠⅡ（齋藤）
 ／漢

文学特殊講義ⅠⅡ（松下）
 ／古典文学研究演習ⅠⅡ（大島・深津・田中）
 ／国語学研究演習ⅠⅡ（齋藤）
 ／漢文学研究演習ⅠⅡ（松下）
 ／課題研究ⅠⅡⅢⅣ（大島・深津・田中・齋藤・松下）

上小倉教授の書が第九回日展に入選

上小倉一志（積山）教授が、改組新第九回日展に入選された。作品は「李白詩」。



令和四年度研究発表会

発表要旨

令和四年十月二十九日（土）

『おくのほそ道』「象潟」章段における
 蘇軾「西湖」の受容 楊 瑩



松尾芭蕉は元禄二年（二六八九）三月二十七日に江戸を発ち、奥州行脚の旅を始めた。八月下旬に大垣に到着し、伊勢遷宮を拝するのために、九月六日に大垣を発つところで終わる。元禄六年『おくのほそ道』の創作に着手し、推敲を重ね、

元禄七年に成立した。芭蕉にとつて、その旅における目的の一つは古人の詩歌に詠まれた名所歌枕を訪問し、自らの体験を通じて古人の精神と共鳴することである。自然の美景と邂逅し、詩心が揺さぶられた芭蕉は古典を踏まえながら、景勝地の魅力を描写し、自然から得た感動を凝縮して表現している。

芭蕉が『おくのほそ道』に数多くの漢詩を織り込んでいることは、すでに同時代の研究書において指摘されている。その代表としては『奥細道菅菰抄』がある。たとえば、『おくのほそ道』「日光」「松島」「象潟」という三つの章段は、それぞれ李白「廬山の瀑布を望む」、杜甫「望岳」、蘇軾「湖上のむ 初めは晴れ 後雨ふる」を踏まえている。出典の考証だけではなく、その表現の考察に関しては、近世から近代まで多くの先行研究が残っており、後世の研究者もこれを追認している。しかしながら、『おくのほそ道』における漢詩の受容は、言葉の借用にとどまるものではなく、その表現技法への応用については、まだ検討の余地があると思われる。したがって、卒業論文では、「日光」「松島」「象潟」という三つの章段を検討の対象として取り上げ、それぞれの章段における修辞技法の考察を通じて、漢詩が芭蕉の文章表現に及ぼした影響、さらには芭蕉の独自性を考察した。

本発表では、卒業論文の第三章「象潟」における蘇軾「西湖」詩の受容」を取り上げて、「象潟」における表現技法の応用、特に芭蕉の獨創性及び後世に与えた影響について、さらに詳しく考察したい。

(博士前期課程)

令和四年度講演会報告

柏木由夫氏

「百人一首」編纂に込められた心 と作者・選歌・配列について

森 絵美里

令和四年十一月十日に開催された国文学会講演会では、大妻女子大学名誉教授の柏木由夫先生に「百人一首」編纂に込められた心と作者・選歌・配列について」と題してご講演いただいた。以下、講演会の内容をまとめていく。

講演はまず、百人一首の内容の概観と、形態についての前史が説明された。次に、基本事項として定家の子孫である頓阿著の『井蛙抄』の跋文、頓阿の弟子の孫である藤原満基書写の『応永百人一首抄』といった文献や、百人一首と共通点の多い百人秀歌の説明がされた。その中で、百人一首を編纂したとされる藤原定家と、後鳥羽院の関係性について触れられていた。後鳥羽院は定家から和歌を学んでいたが、和歌観の齟齬が生じ始めていた。そして、元来の地位の差や、内裏で行われた歌会に定家が参加しなかったこと、内裏に贈った和歌の内容により、関係は決裂した。その後、後鳥羽院、順徳院は承久の乱で佐渡に配

流されることになった。

次に、「百人一首」編纂の心を探る」として、天皇や男性歌人、女性歌人を挙げ、編纂の枠組みが説明された。

この中で私が興味を持ったものが二つある。一つ目は一番歌・天智天皇の「秋の田のかりほの庵の苦をあらみわが衣手は露に濡れつつ」と二番歌・持統天皇の「春過ぎて夏来にけらし白妙の衣干すてふ天の香具山」。そして、九九番歌・後鳥羽院の「人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふゆゑに物思ふ身は」と一〇〇番歌・順徳院の「ももしきや古き軒端のしのぶにもなほあまりある昔なりけり」。この四人の関係と和歌から考えられる配列についてである。百人一首冒頭の天智天皇と持統天皇、末尾の後鳥羽院と順徳院はそれぞれ父子である。定家は意図的に天皇父子を始め、院父子で終わらせたのだと考えられる。平安皇統の祖として、天智天皇の農民を思いやり豊穰を願う和歌と、持統天皇の神話に支えられた大和の初夏の爽やかさを詠った和歌が、古代天皇の人や土地、自然を讃えて詠んだ歌として選ばれた。そして後鳥羽院の現世への苦悩や物思いを詠った和歌と、順徳院の衰えた皇室と盛代を懐かしみ詠った和歌に、今を表す和歌として定家は共感し、時代の明暗を表す枠組みとして、四首を冒頭と末尾に選んだのだろうということである。歌意や四人の関係、配置から、このようなことが読み取れるのである。二つ目は、五三番歌・右大将道綱母の和歌から、五五番歌・藤原公任を挟み六二番歌・清少納言までである。この部分は百人一首の中で最も女性が



集中する。彼女らは一条天皇の御代や、次世代で活躍した女性たちである。百人一首末尾の順徳院の和歌は、皇室の盛代への懐旧の情を詠うものであった。懐かしんだ雅な王朝文化の枠組みとして、平安文学の特色とされる女性たちの活躍した和歌を百首の半ば周辺に配置したのだろうかと考えられる。

私が古典作品に興味を持つきっかけになったのが、百人一首だった。これまで、選ばれた和歌について調べる事は多くあったが、百人一首を一つの作品として見る事は少なかった。配置、選歌などを学び、ここで得た知見を活かし、今後和歌についてだけでなく作品としてさらに調べ、学んで行けたらと思う。

最後になりましたが、今回ご講演いただいた柏木由夫先生に厚く御礼申し上げます。

(三年)

令和四年度文学散歩報告

文学散歩

—ぐらり伊勢のまち歩き—

中村始桜

新型コロナウイルス感染症により、実に三年ぶりの開催となった今年度の文学散歩は、文学ゆかりの史跡にあふれる伊勢のまちの魅力を改めて味わうことを目的として行われた。伊勢というところは、神宮や伊勢参りなど神道にまつわる場所が多いイメージを持つ人が少なくないだろう。私も文学散歩に参加するまではそう思っていた。しか

し、昔の伊勢参りが、ただ神宮を参拝するだけではなかったことから分るように、文学につながる場所も多いのだ。そんな伊勢のまちを、万葉集や古事記などに思いを馳せつつ、ゆつくりと歩いて堪能した。

私たちが文学散歩へと出かけたのは六月二十六日(日)の午後である。午前中はあいにくの雨だったが、幸いにも午後は汗ばむほどの晴天となった。参加者は教職員七名、学生二十名の計二十七名だった。

記念講堂前を出発し、黒門から五輪塔、古市街道を歩き、伊勢古市参宮街道資料館に着いたころには、じんわりと汗をかき始めていた。

伊勢古市参宮街道資料館では古市というまちの歴史を、伊勢歌舞伎や、日本三大妓楼のひとつとしてよく知られていた古市妓楼などの関係資料から知ることができる。現在は外宮から内宮へと参拝するのも整備された道があるが、伊勢参りをする人で古市が賑わっていた時代には、古市街道が外宮と内宮をつなぐ唯一の道だった。この資料館は、個人的に以前から気になっていたため、良い機会となった。資料館内は各々自由に見学していたが、くずし字で書かれている遊女の手紙の前に数名が集まり、文字の読み方について相談するなど国文学科ならではの一面も見られた。

資料館を後にし、麻吉旅館と油屋跡を見学して、資料館で学んだ知識を実際の建物の目に通することを通して深めることができた。当時の風景を残すものが麻吉旅館などのわずかな建物のみであることは残念だが、実物を見ることでイメージが深め

られるため、これからも守り続け、未来へつなげていく必要があると感じた。

また、澤瀉久孝博士と荒木田守武のお墓も参った。どちらも本学国文学科や和歌に深いかわりのある人物ではあるが、このような形でなければ一学生がお墓参りをする機会はなかなかないため、非常に貴重な体験となり印象に残っている。

猿田彦神社にも参拝し、境内での自由時間はおみくじをひいたり、御朱印をいただいたりして思い思いに過ごした。その後、内宮のおかげ横丁にあるおかげ座・神話の館の見学をした。

おかげ座・神話の館では日本神話の世界を立体展示と映像を通して学ぶことができる。映像では古事記や日本書紀の世界を時系列に沿って分かりやすく知ることができる。和紙で作られた立体展示は想像以上の大きさと迫力があった。作品として読むだけでは想像しにくい場面も、立体として目の前に広がるため日本神話の世界に没頭して楽しむことができた。どの展示も文章で日本神話を学ぶのとは異なり、日本神話に詳しい人も全く知らない人も、それぞれ楽しめる魅力的なものであった。

今回の文学散歩



は大学のある伊勢が舞台ということもあり、歩いた場所は身近なところだったが、文学散歩としてめぐること新たな発見と学びの多いものとなった。私の拙い報告では伊勢の魅力のごく一部を伝えることすら難しいが、見慣れた伊勢のまちをもう一度じっくり味わおうと思っていただければ幸いである。また、この報告を読んだことが伊勢を訪れ、風景や歴史に触れるきっかけとなれば嬉しい限りである。

(二年)

合格・就職体験記

《教職・福岡市・中学校》

教職をめざすみなさんに伝えたいこと

大喜多佑斗

振り返れば、やりたいと思ったことをためらわず挑戦したことが大きかったと思います。剣道部、書道部、また教職関係では倉志会に入るなど様々な経験をしました。特に倉志会では、本気で教員を目指すかけがえのない仲間と出会いました。「我以外皆我師」という言葉がありますが正にそれだと思います。ひたすら指導案作成し、模擬授業し、遠慮なく指摘し合うことを繰り返したり、教員採用試験のあらゆる問題を解きあつたり、時には不安や気持ち下がってしまうこともありましたが、教職支援の方や教職アドバイザーの方々に何度も力になってもらいました。本当に多くの考えに触れました。最後の最後まで諦めずに覚悟を持って臨むことができたと思います。実際に本番

なのに面接や指導案作成や模擬授業では楽しくさえありました。

さてみなさんには、今のうちに幅広く経験をし、引き出しを作っておきたいと思います。そして何となくではなく本気で教員を目指す仲間を作ってください。自分に足りないことも何か見つかるかもしれません。そしてそれを補い自分の力となります。覚悟を持って行動すればきっと大丈夫です。頑張ってください。

(四年)

《公務員・鈴鹿市》

公務員を目指す皆さんへ

佐藤有紗

私が公務員の試験勉強を開始したのは二年生の秋頃です。目標を決めてからは必死に勉強しました。公務員コンプリートプログラムや対策講座を受講するだけでなく、大原学園のテキストや問題集を八周程繰り返し、解ける自信をつけました。その甲斐もあり、たとえ一次試験の筆記問題が初見であってもすぐに気持ちを切り替え、次に向けて勉強を続けることができました。二次試験以降の対策は、大学の就職担当やおしごと広場みえの方に大変お世話になりました。本番に近い模擬面接で現実を踏まえた厳しいご指摘をいただき、仕事理解や行政の研究など、足りない要素をクリアしていくことで自信ができました。既に進路を決めた友人も多数いたため、未定状態の自身に焦りや不安も覚えました。同様に公務員を目指す友

人と励まし合いながら、モチベーションを保ちました。

公務員を目指す上で、周囲と異なる就職活動に悩むことはあると思います。同じ道を目指す友人を見つければ、就職担当のサポートを受けることで、一人で頑張るのではなく、皆で協力して目標に向かっていけるのだと考えて、挑戦してください。応援しています。

(四年)

《公務員・亀山市・司書》

司書を目指す上で

天野史菜

私は、図書館で司書として働くことにずっと憧れを抱いていました。特に、地域に根ざした公共図書館で働くことが長年の夢でした。

地方公共団体の図書館司書は、市が運営している場合は地方公務員の扱いとなるため、大学では、司書の資格を取得しつつ、公務員試験の勉強も二年の頃から始めていました。エントリーシートでは、ほとんどの自治体で志望動機を聞かれます。この時、事前に市の総合計画、教育大綱、生涯学習計画等をよく読み、その自治体の目指す方向に合致した自分の長所を推していくと、自分を一番PRできると思います。

そして、最終的には、「諦めない」ということが最も大切でした。私は、大学四年時点で受けた公務員試験には全て落ちていきます。その後、新卒一年目に派遣社員として働きながら、なおも司書

の道を探し続け、昨年は落ちていた市の図書館に採用が決まりました。努力をやめず、追い続けることができれば、夢は叶う可能性がどんどん上がっていくのだと感じました。

（令和3年度卒業生）

国文学会活動報告

【行事】

（令和四年）

4・28 総会（前年度活動報告、会計報告、新年度予算案審議、新役員紹介、研究部

紹介）

6・26 文学散歩「ぶらり伊勢のまち歩き」

10・29 研究発表会

『おくの細道』『象潟』章段における蘇軾

「西湖」の受容 楊 瑩

11・10 講演会

「百人一首」編纂に込められた心

大妻女子大学名誉教授 柏木由夫氏

（令和五年）

1・31 会報 51号発行

【研究部会】

上代文学研究部会（木曜日）

大島信生 教授

萬葉集

中古文学研究部会（火曜日） 吉井 祥 助教

平安文学関係資料を読む

中世文学研究部会（休会） 深津睦夫 教授

近世文学研究部会（火曜日） 田中康二 教授

近世和歌・国学関連文献を読む

近代文学研究部会（水曜日） 平石 岳 助教

表現媒体（メディア）と日本近代文学

国語学研究部会（毎月一回） 齋藤 平 教授

日本語の諸問題

漢文学研究部会（水曜日） 松下道信 教授

道教関連文献を読む

文学館・メディア史研究部会（木曜日） 岡野裕行准教授

文学館やメディア諸問題を検討する

国文学会委員

委員長 森井菜月（三）

書記 水谷 護（三）

会計 西潟史有香（二）

講演委員 永井里奈（二）・法月優希（二）

旅行委員 北吉彩七（一）・森 涉遥（一）

会報委員 楊 瑩（M）

一般委員 大嶋美輝（四）・服部紋乃（四）

西岡愛梨（四）・谷川奈穂（四）

田中美有（四）

令和4年度【国文学会】収支予算書

令和4年4月1日から令和5年3月31日まで

Table with 5 columns: 科目名, 令和4年度予算額, 令和3年度予算額, 差異, 備考. Rows include 新入生会費, 教員会費, 受取利息, 参加費, 前年度繰越支払資金, 収入計.

令和3年度【国文学会】収支決算書

令和3年4月1日から令和4年3月31日まで

Table with 5 columns: 科目名, 令和3年度予算額, 決算額, 差異, 備考. Rows include 新入生会費, 教員会費, 受取利息, 参加費, 前年度繰越支払資金, 収入計.

支出の部

Table with 5 columns: 科目名, 令和4年度予算額, 令和3年度予算額, 差異, 備考. Rows include 見学会・散歩会, 研究発表会, 講演会・学術大会, 研究部会, 刊行物作成費, 事務運営費, 慶弔費, 運営雑費, 予備費, 翌年度繰越支払資金, 支出計.

支出の部

Table with 5 columns: 科目名, 令和3年度予算額, 決算額, 差異, 備考. Rows include 見学会・散歩会, 研究発表会, 講演会・学術大会, 研究部会, 刊行物作成費, 事務運営費, 慶弔費, 運営雑費, 予備費, 翌年度繰越支払資金, 支出計.

皇學館大学国文学会則

第1条 本会は皇學館大学国文学会と称する。

第2条 本会は事務局を本学文学部国文学研究室に置く。

第3条 本会は国語学国文学の研究の促進及び会員相互の親睦をはかることを目的とする。

第4条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1、研究会の開催。

2、講演会・研究発表会の開催。

3、研究誌・会報などの発行。

4、その他目的を達成するために必要な事業。

第5条 本会は皇學館大学大学院文学研究科国文学専攻及び文学部国文学科に関係する教職員・旧教職員・卒業生・在学生(但し国文学科学生は全員加入を原則とする)・また本会の趣旨に賛同して入会を希望する者をもって構成する。

第6条 本会の運営のために次の役員を置く。

1、会長 一名。

2、幹事 若干名。

3、学生委員 若干名。

第7条 会長は国文学科主任教授がこれにあたり、本会を代表して会務を統括する。幹事は国文学科専任教員をもってこれにあて、本会の事業に関する評議を行うものとする。幹事は随時開くことができる。学生委員は、大学院・学部各学年より選出され、幹事会の指示を受け、会運営上の通常業務にあたる。学生委員

として次の委員を置く。

総務委員 講演委員 旅行委員 書記委員

会計委員 会報委員 資料委員

第8条 役員任期は一年とする。但し重任は妨げない。

第9条 本会は年一回春季に定期総会を開く。臨時総会は幹事会の議決を経て開催する。

第10条 本会の会費は別にこれを定める。

第11条 本会の会計年度は四月より始まり三月までとする。

第12条 本会会則の変更を必要とする場合は幹事会において審議し、総会の承認を経なければならぬ。

付則 会費は次のように定める。

1、在学生は入学時に四年間分六〇〇〇円を納めるものとする。

本会則は昭和五十六年十一月一日より実施する。

付則については平成三十一年四月二十五日より改正実施する。

編集後記

○国文学会会報第五号をお届けします。

○近代文学担当として、今年度四月に平石先生がご着任されました。また、今年度は大島先生がご定年を迎えられ、深津先生もご退任となります。三人の先生方からそれぞれ節目のお言葉を頂戴しております。

○以前よりも規模を縮小してはおりますが、今年度は文学散歩とフィールドワークを三年ぶりに実施することができました。文学散歩は皆で一緒に食事をする時間をなくすため、各自で昼食を取ってから午後に集合しての伊勢市内を歩く形となりました。また、全学的な感染症対策の方針により、九月のフィールドワークは日帰りという条件下で行いました。国文学科では昨年度の実施を見合わせた四年生らが日帰りの旅を楽しみました。三年生については令和五年二月下旬に実施する予定で準備を進めています(感染状況を考慮してフィールドワーク未実施のゼミもあります)。

○また、講演会や研究発表会も感染症対策をしながらの対面開催に戻しました。オンラインでのやり取りも日常風景になった昨今ですが、お話を直接に伺う機会の重要性を改めて感じます。

○依然としてコロナ禍の続く世の中ですので、活動を抑え気味にしなければならぬ場面も多いのですが、探り探りながら体験的な学びの機会を少しずつ取り戻しています。

(岡野記)

国文学会会報 第五一号

令和五年一月三十一日発行

編集・発行者 皇學館大学国文学会

(代表 松下道信)

516-8555 伊勢市神田久志本町一七〇四

電話 〇五九六(二二)六四五七

印刷所 アイブレーション